

書評

河村民部著

『詩から小説へ ワーズワスとロマン派の末裔』

(英宝社、2008年)

中島 俊郎

小説研究には詩歌の味読が不可欠であると大学院在学中に恩師より薫陶を受けた本書の著者は、その教えをかたくなに守り、ワーズワスの想像力を基盤におき、比較文学的アプローチで東西の小説群をみごとに腑分けさせて、ワーズワスの想像力とその影響を詳しく論説した3部作をここに集大成させた。『山頂に向かう想像力 西欧文学と日本文学の自然観』(1996)を皮切りに、つぎには自然観の検証を「岬」というトポスで変奏した『「岬」の比較文学 近代イギリス文学と近代日本文学の自然描写をめぐって』(2006)において、自然観の相克と強調を深く追究し、読者のまえにワーズワスの想像力の、多様なダイナミズムの展開を開陳してみせてくれた。これら前二著をふまえて、今回世に問うたのが本書『詩から小説へ』であり、500ページになんなんとする大著となってあらわれた。「ワーズワスとロマン派の末裔」という副題にあるように、ワーズワスの想像力が、ヴィクトリア朝、エドワード朝に輩出された小説の諸作品に、いかなるテーマを与え、モチーフ、イメージなどがどのようなかたちで屈折、伸展、展開していったか、という魅力的ではあるが困難な命題を壮大な構想のもとで検証しようとしたのが本書である。

本書の内容の検討に立ち入る前に「ワーズワスの想像力」が同時代から後世へどのように波及していったかを今しばらく俯瞰しておきたい。想像力がいかに生成され、伝播していったかという本書の中心テーマを通時的側面から照射し、傍証する手続きとして必要であると思われるからである。

ある意味でワーズワスはヴィクトリア朝詩人であるともみなしてもいい。そ

れは何も1842年から1850年まで桂冠詩人として君臨していたという事実だけを指しているのではない。厳然たる現役詩人としてその想像力を駆使していたからである。すでに1842年、マシュー・アーノルドは、「イギリスにおけるワーズワスの名声は確固としている」と指摘している。ワーズワス自身、新しい詩篇を書きつづけ自作の推敲に余念がなかった。『詩集』(*Poems*)の改訂第5版を1836-7年に、それまでの未収録詩篇(*Poems, Chiefly of Early and Late Years*)を1842年にまとめ、自伝的長編詩『プレリュード』を1845年から1849-50年、そして亡くなる直前まで改稿をくりかえしていた(没後1850年7月出版)。

また同時にワーズワスの実作と批評が不即不離のかたちで書き連ねられていき、同時代のワーズワス理解に資していた。ワーズワスの死後、初めて書かれたワーズワス論(“*Wordsworth's Autobiographical Poem,*” *The British Quarterly Review*, 1850)は、ディヴィッド・メイソンによって書かれた。さらに1857年、キリスト教護教論の「透徹した分析と深い洞察に裏づけされた」リチャード・ハットンのワーズワス論(“*William Wordsworth,*” *The National Review*)が続き、そしてハットンとともに『ナショナル・レビュー』を創刊したウォルター・バジヨットは、ヴィクトリア朝社会の現実を見抜く慧眼の士であったが、この『イギリス憲政論』の著者は同時代の文学にたえまない共感をもって接した。文学的リアリティは読者の文学体験に宿るとしたその文学観の根底にはワーズワスがひかえていた(“*Wordsworth, Tennyson, and Browning, or Pure, Ornate, and Grotesque Art in English Poetry,*” *The National Review* 1864)。その後、対象を凝視し、自己のヴィジョンを結晶化することにその特異性をみる、ウォルター・ペイターのワーズワス論(“*On Wordsworth,*” *The Fortnightly Review*, 1874)が続く。そしてヴィクトリア朝のワーズワス観を集約したものともいえるレズリー・スティーヴンの「ワーズワスの倫理」(“*Wordsworth's Ethic,*” *The Cornhill Magazine*, 1876)が発表されるに至る。その詩のなかに「教義」をみとめるスティーヴンの批評は、アーノルドのワーズワス論を形成するうえで大いに寄与した。というのもアーノルドの編纂した『ワーズワス選集』の「序文」(“*Preface 'to Poems of Wordsworth,*” 1879. Reprinted in *Essays in Criticism, Second Series*, 1888)は、スティーヴンの本論に触発され、呼応して書かれていたからである。さらに、

ウィリアム・ナイトを中心として、1880年に設立されたワーズワス協会は、アンソロジー、選集、書簡集、伝記そして協会紀要などを出版し、ワーズワスを「制度化」し、イングリッシュネスそのものへと顕彰することに成功したのであった。

こうした推移につれて、ワーズワスの影響力は無視できないほど肥大化していったのは当然の帰結であった。その感化力は文学界だけに限定されず、社会現象にまで増大したのである。ワーズワス作品は、ヴィクトリア朝の人々の間で道徳的な規範となり、擬似宗教にも比す存在になりえていた。それは単なる文学作品としてあがめられたのではなく、人生の指針を与えるいわば聖書にも比類する地位を獲得していた。その詩篇は、文学という領域を超越して、あらゆる職種、階層を横断して深い影響力を世に浸透させていった。だからワーズワス協会の設立者にラスキン、ブラウニングといった文人から、哲学者、宗教家、教育者、科学者、政治家までが名前を連ねていたとしても何ら驚くにあたらないであろう。精神の危機に陥り、ワーズワスの詩にふれて窮地を回避した J.S.ミルの「体験」は、けっしてミル自身の身の上だけに起こったことではなかったのである。

本書の著者は、こうしたワーズワスがヴィクトリア朝の詩人であったという現象をさらに掘り上げて、もっと深い含意を汲み取ろうとする。つまり文学テキストを生成する想像力に注目し、論を構築していく。結果として、小説「自体」を読むことを第一義に指向する著者の態度は、「近年の目覚しい進展を見せる文学諸理論」に右顧左眄せず、「自己流」に「固執」する。「新文学理論やそれに基づいた論文に齟齬を感じ、己の感性に固執する理由」は、「論理はあるが、文学がないと思う」という違和感を隠そうとはしない。さらに私淑する漱石の言葉を残響させながら、著者は論の中心にワーズワスの諸作品を据えて「あくまで自己本位」の態度でもって、小説テキストを多様に解読しようとする。

そうした意図のもとに構成された本書は、第1部「ロマン派における〈時〉と〈永遠〉」、第2部「ロマン派的自然観の継承と変質」、第3部「ロマン派的自然観からの逸脱と実存主義的人間観」の全3部からなる。

第1部は、第1章「ロマン派の子ども像 ブレイクとワーズワス」、第2章「ワーズワスによる〈永遠〉の探求 〈時〉のもつ問題の解決」、第3章

「『逍遥』におけるワーズワスの時間意識 〈平地〉と〈田舎墓地〉」、第4章「『逍遥』におけるワーズワスの想像力の働き 〈高所〉への飛翔」、第5章「『逍遥』におけるワーズワスの想像力の働き 〈地上楽園〉の成就と喪失」という全5章からなり、各章は、ワーズワスの想像力をそれぞれのテキストに呼応させて多面的に論じられている。

そして第2部では、第1部で措定したワーズワスの想像力のダイナミズムを参照枠にして、シャロット・ブロンテ『ジェーン・エア』(第6章)、ジョージ・エリオット『フィリックス・ホールト』(第7章)、ジョージ・メレディス『エゴイスト』(第8章)、メレディス『十字路邸のダイアナ』(第9章)、トマス・ハーディ『日陰者ジュード』(第10章)、ヴァージニア・ウルフ『燈台へ』(第11章)、といったイギリス文学の諸作品を分析していく。

さらに第3部では、ロマン派的自然観から実存主義的人間観へと人間観が大きく転換する局面を、ヘンリー・ジェイムズ「密林の野獣」(第12章)、ジェイムズ『悲劇の美神』(第14章)、ジョウゼフ・コンラッド『秘密の共有者』(第15章)、コンラッド『闇の奥』(第16章)などの諸作品に求め、新しい価値観、人間観の出現とそれらにたいする既存の価値観との連続性、非連続性を論じていく。いずれの章も叙述は平明で、要を尽くしている。試みに第8章をみてみよう。難解なテキスト『エゴイスト』を著者はワーズワスの子供像と平地から山へ上昇していく想像力に、メレディスにおけるワーズワスの衣鉢を見出し、時の脱却を試みているとみる。ワーズワスのアルプス体験、山にまつわる想像力を巧みに重ね合わせてテキスト間の一致、乖離を明瞭に分析し、著者自身の雄大な想像力をも駆使し、詩から小説への移行を開示している。ここに本書の真骨頂がある。

ただ第3部のなかに「ジェイムズはヴィクトリア朝作家の一人なのか」と題した第13章が挿入されている。これは一考を要するであろう。ジェイムズの「倫理観の特殊性」が F.R.リーヴィスの「偉大な伝統」という枠組のなかで論じられるのであるが、リーヴィスのいう〈偉大な伝統〉という概念自体が、G.エリオットのジェイムズに対する確固たる影響を鋭く指摘している点を勘案するにしても、あいまいすぎるためか、ワーズワスの想像力が一群の作家に与えた影響を論じてきた本論の流れに不協和音をきたしてしまっているのは否めない。伝統という概念は、「人生にたいする深く真剣な関心」と

いう共通項でくくるだけでは到底おおいきれものではないからである。リーヴィスのいう〈伝統〉がつまるところ彼自身の嗜好にすぎなく見えてくる時、影響問題を主張する本書の論旨からいささか逸脱してしまい、著者の主張を逆にそいでしまう恐れはないであろうか。よってこの章はあえてここに挿入せず、付録として本論に対する補足のかたちで問う方がわかりやすかったのではないだろうか。リーヴィスの伝統論よりも著者の力強い「自己本位」に徹してくれれば、と考えてしまうのはけっして評者だけではないと思うのだが。

「作家とその作品」研究という袋小路に迷い込んでしまい、閉塞感に陥った小説研究の現状が一方にある。本書は、詩との連携による小説世界の豊饒さを具体的な分析であらわにすることで、小説が本来はらんでいる無定形な可能性を雄弁に解きほぐし、小説というジャンルの伸長さを際立たせることで、小説研究の打開の一途を示唆してくれている。